

のではなく生かされ支えられている 引受ける意思が生まれ感謝を返す



野田 智義氏

大学院大学至善館 創設者・学長
全人格リーダーシップ教育機関アイ・エス・エル(ISL)創設者

1959年生まれ 京都市出身。東京大学法学部卒業後、日本興業銀行入行。マサチューセッツ工科大学(MIT)スローンスクールより経営学修士号(MBA)、ハーバード大学より経営学博士号(DBA)取得。ロンドン大学ビジネススクール助教授、インシアード経営大学院(フランス、シンガポール)助教授を経て帰国。2001年7月NPO法人アイ・エス・エルを創設。MBAを超えた独自の全人格経営リーダーシップ教育を実践し1,600人を超える卒業生を輩出。2018年8月グローバルビジネススクール至善館を東京日本橋に開学。著書に「リーダーシップの旅」(金井壽宏共著 光文社新書)、訳書に「アクション・バイアス」(ハイケブルック スマントラ・ゴシヤール著 東洋経済新報社)他。

28歳から海外生活13年MBAの申し子で
仏教幼稚園に通っていた頃から仏教に関心を持ち
信心もないのに人間の儂さ世界観に惹かれ
欲望が他人より強い事に嫌悪感を持ち
早く枯れたい悟りたいと思ってきた…

人は独りで生きている そう思えた時自ら責任を

愛国心で日本の為にお役に立ちたいと願い
日本とアジアの価値観で世界の人を育てる決意で至善館を創り
西洋と東洋との対話を可能にし世界に発信してゆく
新しい資本主義とリーダーの在り方を問う
より良い世界秩序の形成プロジェクトに「囚われ」ながら



平井 正修氏

臨済宗国泰寺派全生庵 住職

1967年生れ 東京都出身。学習院大学法学部卒。1990年静岡県三島市龍澤寺専門道場入山、2001年下山。2003年全生庵第七世住職就任。2016年日本大学危機管理学部客員教授就任。2018年大学院大学至善館特任教授就任。現在、安倍晋三元首相や中曽根元首相などの政界・財界人が多く参禅する全生庵にて、坐禅会や写経会など布教に努めている。著書に「最後のサムライ山岡鉄舟」（教育評論社）、「13歳からの仏教塾」（海竜社）、「三つの毒を捨てなさい」（KADOKAWA）、「男の禅語」（三笠書房・知的生き方文庫）「禅がすすめる力の抜き方」（三笠書房・知的生きかた文庫）、「老いて、自由になる」（幻冬舎）など多数。

人の生のはかなさ
 仏教の死生観に共感する

平井 今日は、大学院大学至善館の学長、野田智義さんを指名させて頂きました。お引き受けいただいたてありがとうございます。ありがとうございます。

野田 いえいえ。こちらこそありがとうございます。平井さんの為なら何でもお受けさせていただきます。(笑)

平井 初めてお目にかかったのは、7、8年前、縄文アソシエイツの古田英明さんの坐禅会でした。主宰されているISLという経営者リーダー育成のための研修プログラムに坐禅を採り入れられて、お付き合いが始まりました。野田さんがISLを起ち上げたのはずっと海外で教えられてきて、帰国して何かが足りないと思われたのですか？

野田 28歳から13年間海外で、MBAの申し子です。マサチューセッツ工科大学(MIT)に行つて、ハーバードのビジネススクールの博士で、ロンドン大学、フィナンシャルタイムズのランキング1位になったインシアードで教えていましたが、MBA教育で本当

に人が育つのかと疑問をもっていました。帰国した2000年頃平井さんは何をされていましたか？

平井 山(修行道場)にいましたね。テレビもラジオもない、新聞も読まない山の中におりました(笑)

野田 俗世から離れた素晴らしい環境ですね。その頃、カルロス・ゴーンさんが登場し「グローバルリテラシー」という言葉が盛んにメディアで言われていました。遂に日本でもMBAみたいな教育が一般化するのか、でもそれをして何になるのかなと思つて…。

平井 ご自身が申し子であるにもかかわらず。

野田 もともと戦略論の教授ですからトレーニングとして思考法を教えてきましたが、帰国してISLを始めた時、初めに採り入れたのが、生と死の仏教のセッションの様なプログラムで、その時の師匠が古川橋の龍源寺の住職、松原哲明氏でした。

平井 私の修行道場の先輩です(笑)

野田 大学生の時からの付き合いです。といつても、龍源寺に行つては坐禅をすることもなく、素敵な奥様にすき焼きをご馳走になったり、野球を一緒にしていただけですが。ただ、京都

山科の南殿という仏教幼稚園に通っていた頃から、信心もないのに仏教が持つ力に関心があつて、人間のはかなさと世界観に惹かれていたので、これからリーダーのあり方にとって意味があると、哲明氏にお願いしたのです。60歳という若さで亡くなられてご葬儀に伺いましたが、禅宗のお坊さんのお葬式は死者を弔うというより、死者に鞭打つ様な感じで驚きました。

平井 鞭を打つというか、臨済宗の僧侶の葬儀を「津送」と言います。「津」という字は港という意味で、地名も「津」が付けば全部港ですから「津送」というのは港に送るという意味です。この世での教化を終えて次に行く為に港に送る。次があるかどうかは別として、とにかく港に送る。決して冥福を祈るという様な気持ちではなく、どちらかというところ「いつてらっしゃい」という感じですよ。

野田 全く湿っぽくなくむしろどこか乱暴というか……。これもおそらく仏教の死生観と関係しているのかなと思

平井 一般の方が亡くなった時のしめやかな雰囲気はなく、次へ送るというイメージが強いですね。

野田 哲明氏は「人生は船を漕ぎ出していく様なもの、港を出て途中で人を乗せ、家族を乗せ、子供を乗せて送り出していく。人間ははかない命、舟板一枚、いつ死んでしまふか分からない命だとおっしゃっていました。…」

平井 船ということには直接関係なく、はかない存在の比喩として船という言葉を使われたのでしょうか。我々は今、「電気を何で作るのか」といった本質的な議論もなくオール電化に、みたいな話がありますが、先日関越自動車道で何十台という車が雪で立ち往生しましたね、あれが全て電気自動車だったら全員死ぬだろうと。東日本大震災の時、停電も計画停電も経験して、



野田氏の著書
 『リーダーシップの旅』

あんな事が又いつ起きるか分らないこの国土で、全てを電気にという考えには疑問がありますね。今の便利な生活がどれだけ崩れやすい砂上の楼閣なのかを、我々はあの震災で学んだ筈なのに、ただか10年で、という思いはあります。

野田 閥値を超えると人はあつげなく死にますが、命のはかなさみみたいなものを通常僕らはあまり感じませんね。

平井 仏教では生老病死の「四苦」を説いています。生きている苦しみはいろいろ味わいますが、その後の老病死はどうか。老人になると老人ホームに、病気になる病院に入ってしまうので、死をなるべく見ない様にしていきます。昔は家族全員が、年をとったり病気をするとこうなる、と、大変な状況を目の当たりにしながら生活をしていたと思います。今、コロナで騒いでいますが、疫病は常に世の中にあつて、昔は道端で人が死ぬ、という状態だったと思います。人間というのは、不安の中を生きていくのが正常な状態だと思えます。ところが、その不安がなくて生きていくことが当たり前、という現代人の考えの方がおかしいと思えます。仏教の原点は、人間は不安「苦」

というものの中で生きていくことが大前提なのです。

仏教を通じて考える 「死」と「業」と「欲」

野田 人間教育の一貫として経営幹部

に般若心経を読んでもらうセッションがあるのですが、正直、ほとんど理解できない様です。『生きて死ぬ智慧』(柳澤桂子さん著)の映像では、柳澤さんは病気の苦しみの中で、何故人間は苦むのか、ということに向き合い般若心経の真髓に辿り着かれたのですよね。ビジネスマンにとっては、左遷とか失敗、病気になる時初めて分かるのかもしれない。平井さんはどうしてその感覚が分かるのですか？

平井 寺で生まれ育っていますので、子どもの時から家で葬儀がありました。昔は結構お寺でご葬儀をされることが多かったので、うちにご遺体が運ばれてくるのです。お分りにならなと思います。家には遺体、時には一週間程家に死体がある状況です。小学3年生の頃、手塚治虫さんの『火の鳥』というマンガで、火の鳥の血を飲むと不老不死になるといので、火の

鳥を求めて実際にその血を飲むのですが、周りの人々は歳を取って死んでいくにもかかわらず、自分だけは死ねないという物語を読んで、死ぬとどうなるのか、死とは何だろうかなどと、グルグル考えて3日間ぐらいい寝られなかったことがあります。子どもだから結局いつの間にか忘れてしまうのですが、この世界に入ってから改めて死と向き合う時、子どもの頃、死ということがすごく怖かったことを思い出しました。

野田 ベースに、幼少期の体験があるのですね。

平井 そして今度、自分が話をする為に般若心経などの勉強をし、それを体験に置き換えていくと、仏教とは「無常」…今、この状態は「常」ではない。そういうことだけは常に心の底で思っていますね。

野田 カルマのような感覚はおありになるのですか？

平井 カルマというのは、いわゆる「業」のことですか？

野田 恥ずかしい限りなのですが、欲望が他人より強いことに対する自分の嫌悪感があつて、中学生くらいから「早く枯れたい」と思っていました。

平井 中学生で？(笑) 欲望が枯れたかったのですか？

野田 ええ、それで人生観が仏教と似ていると思つて仏教に関心があるので。ああいうものは、欲望が強く深い業があるが故に逆に体得しうるものとも思うのです。平井さんには、目立ちたい、有名になりたいという欲望はないのですか。

平井 ないですね。日本の国民ひとり1回は坐禅をしてほしいと思つているので、坐禅に関してご依頼をいただいたことは、何でもお受けするという気持ちを持っていますが、個人的に有名になりたいと思つたことはありません。有名になつてもいいことはないと思いませんか。

野田 でも、欲望が強ければ強い程悟りに近づく原動力があるのでは、とも思うのです。小さい頃から、人生の目的は悟りだと思つてきたのですが。

平井 「欲」というものをどう捉えるかですね。私の師匠はよく「大欲を持つて」と言っていました。「お釈迦様を見てみる。衆生無辺請願度しゅじょうむへんせいがんどだ」と。「数限りのない、生きとし生けるもの全てを救う、そのぐらいいの大欲があれば目の前の小さな欲に惑わされること

はない」。小さい欲を持つから惑わされる」と言うわけです。詐欺は絶対になくならない、騙す方が悪いけれど、そもそも儲けたいと思わなければ釣針に食いつくことはない。どういふ風に欲を使うかが人間にとつては重要だ、と。欲がなければ修行をしようという気にもならない、悟ろうとして悟れるものではないが、しかし、そういう想いがなければ何事も成就をしないと言っていましたね。

野田 そうですか、他にもお伺いしたいことがあるのですが。

平井 主客が逆になっていますが(笑)
野田 人間の性格と人格は顔に出ると思っていて、冗談抜きに褒め殺しではなく、平井さんはなかなか立派な顔をされていると思います。

平井 ありがとうございます。

野田 本当に、かなり腹が据わっていないとできない顔をされていますが、もともとその顔なのか、修行によつて顔がよくなったのか……いや本当に、いい顔されていますよ。

平井 気持ち悪いですねえ(笑) 自分の顔は見えませんかからね。

野田 お世辞は言いません、本当です。松原哲明氏が亡くなられてからずっと



野田智義氏

と、仏教を自分でもやりたくて、師匠の様な人を探しました。「アーリーがーとー」と唱えながら24時間断食をする感謝断食というセッションにも、妻と参加したことがあります。

のですが、平井さんの本を読ませていただいた時、何故か、真民さんの詩が思い浮かんだのも理由でしょうか。

平井 それは仏教ですか？

野田 それより「あとから来る者のために」という詩が、そして「浜辺へ行つてごらん。石が自分を磨こうとして一生懸命転がっているから」という意味の詩が、とりわけ好きです。皆さんから「どうして平井さんですか？」と訊かれた時には、「お顔がいいですよ」と答えています。

野田 はい、ただなかなか「この人」という方が見つからず、たまたまうちの卒業生でJITの副会長の岩井睦雄氏から引き合わせていただいた時「お顔がいいので是非教えてもらいたい」と直観で思ったのです。また、当時坂村真民さんの詩集を1日1回読んでいた

平井 ありがとうございます。

「囚われている」ことを知るために坐禅を組む

平井 ISLで経営者教育をして企業からの信頼も厚く、上手くいってたシステムなのに、こんな大変な時期にどうして大学院大学を作られたのですか？ 発想は素晴らしいですが、現実的には非常に困難な作業をされていると思います。ISLでは足りないと思われるのでこの大学院大学なのか、それともISLとは全く別な何かをやりたいと思われたのですか？

野田 周りから見られる自分と自身の内面はかなり違っていて、30歳を過ぎた頃からは、有名になりたいとか政治を動かしたいとかの欲望は一切消え、テレビの取材や番組からのコメントターの依頼もお断りしました。諸行無常ですから、ISLそのものも残すつもりはありませんでした。転機は、10年前の3・11です。何かせねばと、経済同友会にご協力いただき、アイリスオーヤマの大山健太郎氏等と一緒に、全力で東北支援をしました。釜石市長の野田武則氏、気仙沼市長の菅原茂氏、大船渡市長の戸田公明氏と一緒に人材

育成道場をやりました。うちの卒業生が、三陸沿岸に200人もいるのです。

平井 ISLの卒業生が、ですか？

野田 ええ。その時に世界から支援が押し寄せるのを見て、「愚かだな、自分分は」と思いました。13年間海外にいて、「望郷の念、忘れ難し」、愛国心が募りいつか日本に帰ってお国のお役に立ちたいと、2000年から2011年までISLという組織を人生をかけてやってきたのです。でも、「あれ……？自分は日本のことしか考えていない、何と偏狭な……」。そういう意味で愚かだと気づき、決意したのです。「堂々と世界の人達を育てよう、日本が世界にお役に立つことをして初めて日本は元気になるのだ」と。世界の大学院を創り、日本とアジアの価値観で次世代のリーダーを育てればいいじゃないか、そこが始まりで、以来苦労しています（笑）。

平井 そうでしょうね。その東洋的な基盤、東洋的な発想、東洋的な思想から、坐禅を授業に採り入れようと思っただけですか？

野田 理由は3つあって、一番の理由は自分自身、仏教に興味があるという

ことでしょか。仏教系の幼稚園での教育が根っこにあるのでしょうか、生命観、宇宙観、人生観が、仏教に結構近いのです。どうして人間はこんなに苦しまなくてはいけないのだろう、自分にとつて生きることは、苦しみのな

平井 ええ？？？そんなんですか？

野田 大変申し訳ないことに、小学生の時「どうして産んだの」「どうしてこんな苦しみを背負わなくちゃいけないの」等と両親に言ったことさえありました。ふたつ目は、純粋に経営者リ

ダーに座禅が有効だと信じているからです。囚われる、ということがリーダーにとつて最大の落とし穴ですよ、囚われると判断を間違うので。従い、どうすれば「囚われない」状態になれるのがリーダーの挑戦です。自分にとつての坐禅は、自身の「囚われバロメーター」、如何に囚われているかを

自覚するためのものですね。

平井 そんなやりとりの中で、やはりどうしても成功すれば成功に囚われ失敗すれば失敗に囚われる。喜んだら喜びに、悲しんだら悲しみに囚われ



平井正修氏

る、それはもう人間としてある意味仕方のないことで、本当にどれだけ自分というものが囚われている存在なのかを、自覚していく必要があるし、坐することで見えてくるものがあると思います。父は生前、とにかく静かに坐ってみれば「ああ、こんな事だったのか」とか「何だ、こういう事だったのか」という風に、自分自身に落ち着くことができる。それは非常に大切な時間だと言っていました。確かに、我々が専門道場に行くと、「悟り」の様な世界の話になっていきますが、一般の方に坐禅というものを指導する時は、とにかく「自分自身に、落ち着く」というところなのです。人間、自分の顔は見えないし、声も聴こえてはいませんが、野田さんが聴いている私の声と私が中から聴いている声とは全然違います。

野田 平井さんはいい声をされていますよ。

平井 でも、自分が聴いている声イメージが違いますね。人間は、常に自分の事が分からない中で生きている。更に、自分の心もよく分からず生きているからこそ、他人からの評価や評判等に一喜一憂することになるのだらうと思います。そんな時に、ちよつと静

かにしてみれば「褒められてもけなされてもこれだけのもの」というところに落ち着いて、いろんな「因われ」からも、少し落ち着けるかなと思つていきます。ですから、日本人全員に1回は坐禅をしてほしいと願っています。特に至善館での坐禅をお引き受けしたのは、若い人が多く、多分この授業がなければ、坐禅というものに触れることが始まらない、そういう方々に坐禅と縁を結びつけていただけたら、と思つたからです。とてもありがたいことです。

野田 こちらこそ、ありがとうございます。ところで、坐禅を取り入れる最後の3つ目の理由は、現在の資本主義の行き詰まり、さらにいえば、西洋近代の行き詰まりと関連しているのです。背景となつているキリスト教の自然観（人間は神の管財人・スチュワードで、自然を意のままにしてい）が、サステイナビリティを含む様々な問題を引き起こす遠因となつており、これに対して「一切衆生悉有仏性」の仏教には、西洋を補完する役割があると思うのです。キリスト教の創世記では神が命ずるのです。「産めよ増やせよ、地上を支配せよ」と。

平井 我々もキリスト教の方と話す

と、そこに大きな壁があります。人間であろうが犬や猫であろうが、極端なことを言えば植物であろうが、命という意味では全て同じ、と考えていますから。

何故、シリコンバレーで 禅がもてはやされるのか

野田 シリコンバレーの人はどうして禅に興味があるのでしょうか。彼らが苦しみを持っているからとは感じられません。精神集中力を高め、仕事の能率を上げる為のパワーヨガみたいな感じなのでしょうが、最近はい。

平井 シリコンバレーに行つて直接お訊きしたことがないので、想像ではないのですが、例えば、アップルのステイブ・ジョブズが禅を目指したのは、当時の流行りのヒッピー的な部分と、彼自身が挫折の中から立ち上がったところもあるのでは、分ります。ただ一般的なシリコンバレーの方々が禅を目指すというのは別ですね。コロナ前は、年に1回は必ず海外に出て坐禅を教えていましたが、やはりどこかまだ神祕主義的で、「今まで持つていなかったパワーがつく」様な思いが強

かったですね。でもそうではなく、逆に捨てていくことが坐禅なのだ」と説明をしますが、納得できているのかどうかわかりません。

野田 「空」ですからね。最近仮説のようなものがあつて、シリコンバレーのようなITの人のネットワーク的な世界観・宇宙観が、西洋的な主客分離の二元論と違つて、万物が繋がつていくという仏教の二元論に近いからではないか、と思うのです。シリコンバレーの人達と話す機会が多くあるのですが、デジタルやインキュベーションの仕組みは、必ず多くの人にチャンスを与え、機会の平等として繋がると、強く信じているのです。先日会つた、UCバークレー大学を舞台にベンチャーキャピタルをやっている、中国人の男性は「素晴らしい世界に僕等は生きてる」と言うのですね。「たとえ、アルバニアやアフリカで両親が教育を受けていなくても、その人にアイデアとパッションさえあれば、必ず世界は、その才能を拾つてくれる」と。「シリコンバレーの文化はペイフォワードで、誰かが手助けしてくれたペイフォワードで救い上げられた人達が、次に返していく世界だ」と言います。

平井 ただ一方で、例えばアメリカで東洋人が差別を受けたり、アメリカファーストや日本でも都民ファースト、アスリートファースト等「何々ファースト」という言葉がよく出てきますが、世界の国々の情勢から見ると、本当にシリコンバレーはそうなのか、と思うところはあります。

野田 世界は二極化しているんですよ。何々ファースト」というのは、いわゆるラストベルトのホワイトの人達で、取り残された不安で自分が抑圧されているというのが、逆の鬱屈としてヘイトスピーチになったり差別政党になったり。一方、自由にどこでも行けて、誰でも繋がつて、どこでも仕事ができる一部のノマド（知的遊牧民）達がいます。そういう意味ではシリコンバレーは遊牧民のネットワークなのかも…。

平井 ただ、全世界の人々が平等にということまでは思つていなくて、あくまでも自分達が繋がる世界、ということでしょうか。

野田 どうでしょう。フェイスブックは全く知りませんが、グーグルは全ての情報を皆に与えることによって、政府の抑圧や誰かに従属するというとこ

るから、解放できると思っっているのかもしれないですね。ブロックチェーンの信奉者である、クリプト・アナキストと称する新しい無政府主義者達は、ネットの世界こそが、政府を始めとする中央集権権力から人々を開放すると信じている様ですから。

人類の未来の為に伝えたい 「人に生かされていること」

平井 至善館の学生達に対して、方向性としての思いは如何ですか。

野田 「何故坐禅か」に関してはシンプルなのです。基本は資本主義社会と自由主義社会は避けて通ることができません。資本主義は、人間の自由を希求するという根本的な欲望と絡んでいるので否定することはできないし、多くの挫折があっても、自由を開放するという方向に人間は動いてきたと思います。そういう意味では、いずれ中国も開放すると思います。

平井 本当にするのでしょうか。

野田 分りませんが、3000年ぐらいの歴史で見れば、自由は再び解放されるのではないかと思います。

平井 どのくらいのスパンで見るとか

すね。

野田 その前提で、自由競争の結果としての格差（結果の不平等）は避けられないと思います。そうした前提で、リーダーの役割と責任をどう捉えるか。至善館では、カリキュラムの最後に、学生達に「リーダーシップの基本は、With greater responsibilityです」と伝えます。これは映画『スパイダーマン』で、アンクル・ベンがスパイダーマンの主人公に送った言葉で「より大きな力にはより大きな責任が宿る」という意味です。至善館は、自分が授かる力に応分するだけの負担をする人間を育てたい、何故なら人間には二面性があり、自由に自己努力と自己責任で生きているようにみえても、周囲に支えられているからなのです。

平井 二面性ですか？

野田 個人主義で自分が頑張ったという側面、もうひとつは、頑張ったつもりでも実は他人が支えてくれて、一緒に働いてくれたという側面です。これは「陰」と「陽」の様な人間の2側面で、エコシステムの中で生きているということです。人が「人に支えられている

から、自分が自分をリードして頑張れる」と思えた時に、自らの意思で責任を引き受けるという覚悟が生まれる、と思うのです。つまり人に対してその期待に応え、感謝を返す等です。この200年の間、西洋近代後の個人主義があまりにも強すぎて、人間は、自分ひとりで生きている様な感じを持っています。我々東洋は、生かされているという感覚を持っています。

平井 確かに「生かされている」というのは東洋的かもしれませんね。

野田 今、日本とアジアが人類の未来の為に世界に貢献できるのは、この「生かされて、支えられている」という感覚を、どこまで世界に伝えられるか、だと思ふのです。人間が持つ二面性を前提に、教育や企業、社会の本質をしっかりと発信して、新しい社会や人間のあり方、企業経営のあり方を人類共通の理解として構築することができるとしても、この二面性が得心された時、言い換えると「生かされている」ということを自ずと感じた時、「ありがとう」という気持ちの内発的に生まれ、人や社会の期待に応えよう、貢献しようというWith greater

power comes greater responsibility意識となり、これが資本主義をより平等に、より人間的に、より持続的なものへと進化させる、重要な道筋だと思っっています。ところが、現代社会では「ありがとう」の反対言葉の「当たり前」がどんどん一般化しています。西洋の個人主義をベースにする契約社会、市場取引の浸透をシステム化と呼びますが、この広がりの中で、人々が「ありがとう」の支え合いの人間関係ではなく、損得勘定をベースとする取引関係へと急速に変容してきたことが、社会と世界の混迷の原因だと思います。至善館では、仏教も含めて、東洋思想というものに深く向き合っていきたいのです。

平井 それがこれからの至善館という大学が向かう方向性なのでしょうね。

野田 ええ、本当は仏教の方々、儒教の方々、神道の方々に、もっと発信していただきたいのです。仏教には社会変革の力がないのでは…と時々不満に思っています。

平井 基本的にはないと思います。特に禅にはないですね。「群れない」というものですから。

野田 そうですよ。そういう「社会を良くする」という発想は元々禅にはないのですか。

平井 仏教の基本思想としてはあまりないですね。究極に行けば行く程、お釈迦様が言われた様に「人はサイの角の様に独り歩め」という所に行き着くでしょうね。あくまで、後の人達が教団として大きくしていく中で、社会奉仕の様なことに力を入れていくということにはなりましたが。

野田 仏教の指導者の方々は、道端で倒れている人や、飢えている人に対してどう思われるのでしょうか。

平井 それは同じ尊い存在であるのですから、救わなければいけません。が、集団を創って社会に働きかけたり、政治的に何かをしようということにはなりませんね。

野田 世界で未だに飢えている人がいたり、日本でも豊かさの中での子ども達の貧困等、多くの社会課題があります。仏教の指導者の方々はどの様に考えていらっしゃるのでしょうか。

平井 そういう意味では、個々のお寺や教団というレベルでは、皆さん本当にいろいろやっておられますが、それを発信することが得意ではないという



対談を終えて

ですよ。大きな皿があつて長い箸があつて、という話。長い箸を持つて自分で食べようとすると食べられないけれど、相手に食べさせてあげればいいじゃないかとね。

野田 いい社会と悪い社会は人の心の持ち様で決まる、いい社会と悪い社会を分けるのも、人の心の持ち様だと思います。でも、いい社会を創る為の社会変革をやること自体が、仏教では「良いことをしたい」という気持ちに

矛盾ですよ、この「囚われる」という気持ちは。囚われている」とされるのでしょうか。

平井 確かに矛盾といえば、自分の思いにこだわるということですからね。「より良く」ということで、どこまでいっても「自己」を離れることはできないと思いますよ。

野田 そういう意味では、僕と至善館は究極の自己矛盾の塊みたいな存在ですね。

平井 いいじゃないですか(笑)。そもそも「至善」という言葉を付けただけでも、かなりのこだわりですよ。善に至る、ですから。

至善館が目指すのは 西洋と東洋の対話

平井 至善館のお話をうかがっていて、少し宗教的、仏教的なニュアンスが強い様に感じましたが、受講される方は最初から理解しておられるのでしょうか。

野田 今日は平井さんとの対談なので、仏教の話が全面に出ています。が、もともとは欧米型のビジネススクール教育を出発点としているカリキュラムです。戦略論やマーケティング、ファイナンスなども普通にやっていますし、デザイン思考やシステム思考という、世界の大きな潮流も大胆に取り入れています。AIのプログラミングまであります。通常のビジネススクールにはない、リベラルアーツ教育も大きな特徴の一つですが、基本になつてい

るのはやはり、西洋近代を作り上げてきた西洋哲学、社会システム理論、科学技術論などです。中国の古典を中心に、東洋思想を日本語と英語それぞれで教えていますが、あくまで西洋的なパラダイムの補充の様な位置づけです。ご紹介したカリキュラムの最後の議論も、「今まで生きてきた中でお世話になった人達を洗い出して、自分はこのから未来に向けてどうお返しをするのか」という、ワークの中での一コマにすぎません。

平井 そこで、仏教とか日本であるということを出しているわけではない、と。

野田 はい。でも前面ではありませんが、東洋や日本は至善館の重要な要素です。至善館はもともと「世界のどこにもない教育、日本発の教育をします」としています。我々日本人は、平気でアメリカや欧州の学校に行つて勉強しますが、アメリカで留学生が学ぶ経済学などの現代の学問は、意外に宗教、とりわけキリスト教に密接に関連しているのだと思うのです。特にアメリカは、プロテスタントをベースとする宗教原理国家だと思えます。うちでは橋爪大三

郎氏という日本を代表する宗教社会学者に教えていただいているのですが、彼は、プロテスタントの精神がアメリカ人のマナー・マナー・マナーの信奉を支えているのだ、と云うのです。何故かと言つと、「マナー・マナーにはそれぞれに神の息吹が宿つている」のだと。つまり、アダム・スミスの『国富論』に出てくる「見えざる手」には神の意志が働いているのだと。だからアメリカ人はあれだけひどい格差も許容するのだと…。

平井 「見えざる手」とは、「神の見えざる手」のことだ、と。

野田 はい。このほかにもミクロ経済学では、人間は苦痛としてのレイバー労働と、喜びのためのレジャー労働を二者択一で選択するという前提を置きます。でも日本はどうでしょうか。仕事は「道」であり「生きる」とそのもの」というのが勤労観ですよ。いまは、アメリカなるものを盲目的に信じている人たちが、ワークとライフは別々だから、ワークライフバランスだ、コンプライアンス、ガバナンス、ダイバーシティなどと呼ぶ傾向があるように思えます。結論には賛成しますが、輸入モノの言葉が背景の理解

がないまま主張されることに違和感を感じます。ところが、西洋はこれを「科学」という名の下に実証し、応用してセオリーとして発展させていきますね。東洋の仏教や儒教、それをベースにした思想にはそれができません。それで、いつの間にか文明論として、アジアの文明が忘れ去られて、目に見えるような学問は実は、西洋の近代以降、キリスト教原理の影響を強く受けているにも関わらず、盲目的に受け容れてしまっていると思うのです。本来、個人の理性に出発点をおく、主客分離の二元論と人や社会や自然との関係性の中に存在を見る一元論は、人間存在を見る上で、どちらも欠くことができない視点だと思つているので、仏教や神道、ヒンズー教も含めて、より良い社会というものを、そして人間というのはどういふものかを、世界に対して発信していかななくてはいけないと、「囚われ」ながらも真剣に思っているのです。

平井 我々仏教者というのは、基本的に本当に奥ゆかしいのか、そこま

で能力がないのか、そういう意味では私を使つていただけで、是非にありません。今おっしゃったようにやっ

ぱり発信していくことは大切なことだと思いますので、引き続き仏教応援者として、是非宜しくお付き合い下さい。

野田 今、至善館ではフューチャーオプキヤビタイズムというプロジェクトを、スペイン、インド、ブラジルのパートナー教育機関と一緒に実施しています。それは、資本主義の未来とリーダーシップとビジネスのあり方を、西洋と東洋の融合も含めて考えるという壮大な実験です。3年後には世界の30のビジネススクールから300人の学生が参加し、ともに未来を展望し、自分たちの役割と責任を展望するというプラットフォームにする計画です。至善館が触媒となつて、西洋と東洋の対話を可能にし、世界とどうやって新しい資本主義とリーダーシップのあり方を創つていけるか、安寧で豊穡な未来のための世界の新秩序を形成せんという、「囚われる心」丸出し(笑)で取り組んでいこうと思ひます。

平井 いいじゃないですか(笑) それも目指すところに入れましょうか。あ

野田 こちらこそありがとうございます。ありがとうございました。